

職業選択不安尺度の作成

筑波大学大学院人間総合科学研究科 松田 侑子

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 永作 稔

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 新井邦二郎

Developing a scale for career choice anxiety

Yuko Matsuda, Minoru Nagasaku and Kunijiro Arai (*Institute of psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to develop a scale for evaluating the career choice anxiety, and to examine its reliability and validity. A questionnaire concerning the career choice anxiety, career decision-making self-efficacy, and trait anxiety was administered to 247 undergraduates. Factor analysis extracted four factors such as "self-awareness anxiety," "transition to work anxiety," "career-awareness anxiety," and "decision strategy anxiety". The alpha coefficient was sufficiently high to confirm its internal consistency. Correlational analysis confirmed sufficient construct and concurrent validity. These results suggest that this scale can be used in evaluating the career choice anxiety.

Key words: career choice anxiety, college students

近年、「フリーター」や「ニート」といった若年雇用の問題に社会的な関心が寄せられている。一時は「就職氷河期」と言われるなど、若者の就職は厳しいものとされてきたが、最近では就職率の上昇が見られるなど、就職状況の改善が認められている。しかし、これは、若年雇用の問題の解決を意味するものではない。例えば、24歳以下の若者の失業率は2003年、フリーターは2004年より減少に転じてはいるが、ニートの状態にある無業者やフリーターは依然として多い状況であり、課題は残されているとされる(厚生労働省, 2007)。これらの問題については、厳しい社会情勢によって「学生から社会人への移行」を難しくしている一方で、「雇用がないから若者が就職できない」という単純な社会問題を越えた深い問題を根本に抱えていることが指摘されている(小杉, 2005)。

これらの社会問題を理解する上で、これまでの心理学の領域では「移行 (transition)」といった観点から検討されてきた。そもそも「移行

(transition)」というのはそれ自体がリスクを内包したライフイベントなのであり、基本的には、その個人の準備状態が整ってなくても、入学や卒業、近親者との死別、定年退職といった形で迫られることとなる(会沢・石川・小嶋, 1998)。従って、移行が円滑に進まないことによって生じる問題は多い。生涯を通じて見られる数々の「移行」の中でも、大学から職場への移行、つまり学生から社会人への移行は、人生周期上大きな転換期として位置づけられており、就職はその時期の重要な発達課題とされている(山本・ワップナー, 1992)。青年期に自分の将来について考え進路を決断することは、誰もが経験する人生の大きな節目であるといえるが、特に青年後期にある大学生の進路選択が、現時点での適応やその後の生き方を左右する重要課題であることは、過去の研究からも見て取れる(エリクソン, 1973; Super, 1960)。しかしながら、進路の決定はそれまでの進学先の決定と異なり、多様な選択肢の中から自分の生き方を決め、自己を振り返り

多くの情報を駆使しなくてはならない。特定の職業を選択するという事は、それ以外のものを断念し喪失するということが必要であり、自己の問い直しに加え、将来の自己への賭けといった不安と緊張に満ちた作業となるのである。従って、同一性が脆弱し混乱している学生においては、何も失いたくないが故に何も選べず、葛藤がより一層深まってしまうかもしれないとされる(山本他, 1992)。

このような、進路についての決断を下すことへの困難さについては、「進路不決断 (career indecision)¹⁾」という観点から研究が行われてきた。進路不決断とは「自分の職業として何を志望するか何らかの理由により決定しない、あるいはできない状態」をいい、これから就職しようとしている学生に適用される概念であると捉えられている(松尾・佐野, 1993)。渡辺・ハー(2001)によると、不決断をはじめとするキャリアの問題には、情緒的あるいは行動上の問題(例えば、うつ状態、対人拒否、過激な攻撃行動など)、身体的健康問題が付随していることが多いとされ、当人が置かれた状況の要因だけでなく、状況に対する本人自身の認知の仕方・対応の仕方への援助や心理的な問題に対する援助の必要性を指摘している。しかし、従来の進路相談においては、情報提供などの道具的な援助に偏りがちであるとされており(清水, 1990)、進路選択に対する心理的・情緒的な支援の必要性が強調されてきている(船津, 2004; 喜田・高木, 2002; 松尾・佐野, 1993)。以上の指摘から、進路選択の時期におけるサポートは、学生に対する道具的な援助と情緒的な援助が統合されていることが求められている。

一方、就職活動を行う時期は、進路選択において重要であるとされ、就職活動への取り組み次第によっては、円滑な社会人への移行が行えない可能性ある。例えば、大久保(2002)の『新卒無業』では、「無業」になってしまう若者の分析がヒアリングに基づいて若者がいつ・どのような段階で就職を諦めてしまうのかといった視点から分類され、就職活動を行う学生に対しては、活動自体を円滑に進められるような支援を行うことが大きな課題となってくるといえる。しかし、進路選択が個人にとって極めて重要な意思決定である(スーパー, 1960)とい

う点から、不安が伴うのは自然なことであり(斉藤, 2001; 清水, 1983)、その不安が円滑な就職活動を妨げている可能性も考えられる。心理的援助の観点からは、職業選択の不安に対して詳細な検討の必要性が指摘されている(松尾・佐野, 1993; Salomone & McKenna, 1982)。

就職に関連し、大学生の進路不決断を予測する要因として提出されている概念としては、「就職不安」(藤井, 1999)が挙げられる。ここでは女子学生の就職不安が「就職活動不安」「職業適性不安」「職場不安」の3つから構成され、その中の「就職活動不安」がストレスと抑うつに強い正の相関にあることが示された。このように、就職活動中における不安はストレスや抑うつなどを説明しており、就職活動を妨げる要因になっていると考えられる。しかし、職業選択の不安は就職活動中における不安だけであろうか。従来の研究では、職業決定、就職活動中、就職決定後の何れかの時点における不安を区別して用いてこなかった。しかし、就職活動は比較的長期間にわたって展開される活動であり、どの時点にいるかによって、不安を感じる対象や内容、程度が変わってくるのが考えられる。例えば、「うまく面接でアピールできるか」といった不安は、就職活動中もしくは直前においてのみ顕著な不安である。これに対して、「どういった仕事につけばいいのか」というような、就職活動中をはじめ、職業決定前にも全般的に見られる不安もある。

以上を勘案し、就職活動中に感じる不安について、ここでは大きく二つの種類に分けることとする。一つは就職活動前から比較的長い期間経験される、職業を選択することから生じる不安である。この不安は学年によって感じ方が異なってくると推察される。もう一つは、就職活動中のみ経験される、就職活動そのものから生じる不安である。このような観点に立つと、職業選択、就職活動中、就職決定後などを同時に扱うことは適当でないといえ、職業選択の不安を扱う際にはどのような時期において生じるかを念頭に検討することが重要であると考えられる。加えて、藤井(1999)の就職不安の定義として、「心配」「戸惑い」「将来的な見通し」「絶望感」などを含めており、語尾に「悩んでいる」と表現していることなどから類似の情動体験である抑うつを同等に用いているといった問題点が挙げられる。

以上を踏まえ、本研究では大学生の就職活動前にも見られる職業選択における不安に着目することとした。ここでは、これを職業選択不安とし、就職活動を行わないような、企業への就職以外の進路を志

1) indecision の訳語は研究者間で一致していない。不決断(清水, 1983; 浦上, 1995)、未決定(下山, 1986; 若松, 2001)などが用いられているが、ここでは「不決断」を用いることとする。また、進路不決断ほぼ同義の言葉として職業不決断(vocational indecision)という言葉もあるが、ここでは「進路不決断」で統一する。

望する学生にも生じるとする。不安と類似の情動体験を区別し、職業決定前にも特徴的に見られる漠然とした不安を念頭に置いた、職業選択不安尺度を作成し、尺度の信頼性と妥当性の検討を行うこととする。

尺度の信頼性については、 α 係数による内的整合性の検討を行う。また、妥当性については、構成概念妥当性及び、併存的妥当性を検討する。構成概念妥当性については、進路選択に対する自己効力（浦上, 1995）との関連を明らかにする。Bandura (1977) によると、不安や緊張といった情動的喚起は自己効力の形成を阻害するとされている。ここから、職業選択不安の高い者は、進路選択に対する自己効力感が低いことが予測される。これに関連して、西山 (2003) は、就職不安（藤井, 1999）の下位尺度である職業適性不安が高い者は進路選択に対する自己効力感が低いことを示している。また、併存的妥当性については、特性不安との関連を検討する。職業選択不安と特性不安は何れの尺度も不安を測定するものであるために正の相関があると予測される。

また、従来の進路に関する研究ではしばしば女子学生・短大生を対象とした研究（藤井, 1999など）が散見される。これまでの研究で女子学生に調査対象を限定する理由として、「女子学生の就職難が男子学生に比べてかなり深刻である」こと、「男子学生に比べて、“必ず就職しなくてはならない”といった就職への圧力が強くないために、かえって個人の就職に対する意識あるいは感情が就職活動に大きく反映されやすい」ことが挙げられている。しかし、「就職」という人生の節目が危機的なものであるのは女子学生に限られたものではなく、男子学生においても同じであるのではないだろうか。例えば、ニートの構成を見ると女子よりも男子の方が多い（小杉, 2005）という現実からも性差は検討の余地が残っている。よって、本研究では、性差を検討し、時期における差、すなわち学年差も含めて検討することとする。

以上の尺度作成により、職業選択全般にわたる不安を把握することで、どのような時期にどのような援助が必要であるかに関して、改善点や対処法を提案することが可能になると考えられる。

方 法

調査対象者

関東圏内の国立大学1校に所属する計247名（男性96名、女性149名、不明2名、平均年齢

20.22±1.54歳）を対象とした。回答した学年の構成は1年52名、2年59名、3年125名、不明11名であった。

調査手続き

2007年9月上旬-10月上旬に、就職ガイダンス、大学の授業で、無記名方式で実施した。

調査材料

- ①職業選択不安に関する項目：先行研究、文献、就職情報サイトを参考に職業を選択する際に不安に関する41項目を収集した。「以下に書いてあることは、あなたにどの程度当てはまりますか」という教示の下、「1：全くあてはまらない」-「5：とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。
- ②STAI日本語版（清水・今栄, 1981）の特性尺度：Spielberger, Gorsuch, & Lushene (1970) のSTAI（状態-特性不安検査）の日本語版である。本研究では、特性尺度を用いた。
- ③進路選択に対する自己効力尺度（浦上, 1995）：Taylor & Betz (1983) のCareer Decision-Making Self-Efficacy Scale (CDMSE) を参考に作成されている。「以下に30のことがらがあります。あなたはそれぞれのことがらを行うことに対して、どの程度自信がありますか」という教示の下、「1：非常に自信がある場合」-「4：全く自信がない場合」の4件法で回答を求めた。

結 果

職業選択不安尺度の因子構造を信頼性の検討

41項目の中で、得点に偏りの認められるものを除外するために、項目平均±1SDが測定範囲（1-5）を超えている項目のチェックを行ったところ、1項目にフロア効果が認められた。この1項目を除く40項目に対して、4因子想定の主因子法プロマックス回転による因子分析を行い、負荷量が.40以下である項目と、.35以上の二重負荷のある項目を除外した結果、最終的に32項目が妥当であると判断した（Table 1）。なお回転前の4因子で32項目の全分散を説明する割合は59.81%であった。第1因子には「自分が何をやりたいかわからないのが不安である」などに高い負荷量が見られた。これらの項目は、自分についての理解に関する不安であることから、「自己理解不安」と命名した。第2因子には、「社会人として自分がちゃんとやって行けるかどうか不安である」などに高い負荷量が見られた。これらの項目は、職業への移行に関する不安であることから、「職業移行不安」と命名した。第3因子には、

「業界、職種、企業などについてよく知らないのが不安である」などに高い負荷量が見られた。これらの項目は、職業についての理解に関する不安であることから、「職業理解不安」と命名した。第4因子には、「いろいろ考えすぎてひとつの職業に決めら

れないのが不安である」などに高い負荷量が見られた。これらの項目は、職業を決めていくことに関する不安であることから、「決定方略不安」と命名した。また、これら4因子間の相関は、.30-.69である。

Table 1 職業選択不安尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3	F4	M	SD
自己理解不安 ($\alpha = .93$)						
15 自分が何をやりたいかわからないのが不安である	1.01	-.14	-.12	-.08	2.90	1.31
5 自分の興味を持てる職業が見つからず不安である	1.01	-.09	-.15	-.14	2.51	1.19
27 自分がどんな職業に興味があるかわからないのが不安である	.85	-.06	.02	-.06	2.66	1.21
9 どのように自分にあった職業を見つけたらよいかわからず不安である	.71	-.08	.17	.07	3.26	1.28
33 自分がどのような職業に向いているかわからないのが不安である	.70	-.01	.11	.06	3.07	1.16
17 どういった仕事につけばよいかわからず不安である	.64	-.03	.20	.04	3.17	1.19
14 自分にあった職業が見つかるか不安である	.63	.05	.08	.11	3.24	1.28
1 今まで自分の将来について真剣に考えたことがないので上手く進路を選択できるか不安である	.58	.06	.12	-.09	2.88	1.20
8 何を基準にして職業を決定すればよいかわからず不安である	.58	.01	.20	.10	3.21	1.26
3 自分で職業を決めることが不安である	.54	.27	-.12	.11	2.66	1.31
30 大学で学んだことを活かせる職業が見つからず不安である	.50	.00	.08	-.05	2.63	1.22
2 志望する職業が最良であるかわからず不安である	.48	.16	.00	.15	3.39	1.14
4 働くことの意義がわからず不安である	.42	.25	-.16	.07	2.17	1.03
職業移行不安 ($\alpha = .87$)						
18 社会人として自分がちゃんとやっていけるかどうか不安である	.01	.88	-.03	-.04	3.19	1.26
22 社会人として自立できるか不安である	-.01	.79	.07	-.06	2.96	1.28
13 社会に出て人並みに働いていけるかどうか不安である	.03	.78	-.06	-.11	3.06	1.29
26 社会に出て行くことが不安である	.10	.72	.03	-.02	3.01	1.29
23 自分は企業で働くことに向いていないのではないかと不安である	.04	.58	-.07	.13	2.88	1.27
32 社会人として規則正しい生活ができるか不安である	-.24	.58	.11	.01	2.74	1.34
12 自分が働いているイメージがつかず不安である	.27	.47	.10	-.04	2.93	1.20
10 社会人になると自由な時間が制限されてしまうのではないかと不安である	-.07	.46	-.03	.13	3.10	1.33
職業理解不安 ($\alpha = .86$)						
16 業界、職種、企業などについてよく知らないのが不安である	.12	-.14	.80	-.09	3.60	1.14
24 いろいろな職業があることを十分に知らないのではないかと不安である	-.10	.05	.78	.09	3.52	1.12
34 職業の内容がよくわからず不安である	.13	-.05	.72	-.10	3.06	1.14
36 もっと職業について知る必要があるのではないかと不安である	-.18	.10	.67	.18	3.85	.96
28 興味のある職業に必要とされるスキルについて知らないことが不安である	.11	.01	.59	-.01	3.21	1.17
41 志望する企業で実際に働いたらどんなことをするのかわからず不安である	.10	.19	.57	-.16	3.16	1.14
決定方略不安 ($\alpha = .87$)						
20 いろいろ考えすぎてひとつの職業に決められないのが不安である	.07	.02	-.18	.88	2.99	1.24
11 興味を引く職業がいくつもあってひとつに決められないのが不安である	-.17	-.09	-.05	.84	2.93	1.26
37 たくさんある職業を一つに絞っていけず不安である	.11	-.07	.14	.75	3.10	1.18
38 いろいろな職業の中でどれがいいか迷ってしまい決められず不安である	.12	-.04	.14	.72	3.05	1.24
39 一つの職業に決めることは他の選択肢を捨てるようで不安である	-.11	.18	.02	.60	2.89	1.27
因子間相関						
	F1	-	.53	.69	.50	
	F2		-	.50	.30	
	F3			-	.54	

次に、この職業選択不安尺度の信頼性係数として、 α 係数を算出したところ、「自己理解不安」では $\alpha = .93$ 、「職業移行不安」では $\alpha = .87$ 、「職業理解不安」では $\alpha = .86$ 、「決定方略不安」では $\alpha = .87$ 、全体では $\alpha = .94$ という高い数値が得られた。従って、本尺度は十分に高い内的整合性を備えているといえる。

尺度の内容的妥当性の検討

尺度の内容的妥当性を検証するため、就職課職員に本研究で使用した尺度項目が妥当かどうかについて評定を求めたところ、いずれの項目についても評定率は高く妥当であると判断されたため、内容的妥当性があると判断した。

尺度の簡便化

因子分析の結果、4因子32項目の職業選択不安尺度が作成され、以上から信頼性・妥当性共に十分に備えた尺度であることが示された。しかし、回答者の負担や実用的側面を考慮し、より簡便な尺度にする必要があると考え、各因子から因子負荷の高い項目を4つ選定し、計16項目の職業選択不安尺度を作成した。

短縮版職業選択不安尺度の因子構造と信頼性の検討

最初の因子分析同様、16項目に対して主因子法プロマックス回転による因子分析を行った結果、第1因子「職業移行不安」、第2因子「自己理解不安」、第3因子「決定方略不安」、第4因子「職業理解不安」の4因子構造が確認された (Table 2)。なお回転前の4因子で16項目の全分散を説明する割合は73.65%であった。これらの因子間相関は.20-.61であった。

続いて、尺度の内的整合性を検討するため、 α 係数を算出したところ、全体では $\alpha = .90$ であり、依然十分な信頼性を備えていることが示された。また、因子別に α 係数を算出すると、「職業移行不安」は.88、「自己理解不安」は.88、「決定方略不安」は.82、「職業理解不安」は.88であった。以上から、短縮版は同じ因子構造を持ち、十分な信頼性を兼ね備えた尺度であるといえる。

短縮版職業選択不安尺度の妥当性の検討

次に、27項目版の尺度と同様、構成概念妥当性・併存的妥当性を検討した (Table 3)。

構成概念妥当性の検証のため、短縮版の職業選択不安尺度得点と進路選択に対する自己効力尺度得点

Table 2 短縮版職業選択不安尺度の因子分析分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目	F1	F2	F3	F4	M	SD	h ²
職業移行不安 ($\alpha = .88$)							
18 社会人として自分がちゃんとやっていると不安である	.94	-.01	.03	-.05	3.19	1.27	.84
13 社会に出て人並みに働いていけると不安である	.82	.00	-.02	-.10	3.06	1.29	.60
22 社会人として自立できるか不安である	.75	-.05	-.01	.11	2.96	1.28	.62
26 社会に出て行くことが不安である	.69	.09	-.03	.10	3.01	1.29	.60
自己理解不安 ($\alpha = .88$)							
15 自分が何をやりたいかわからないのが不安である	-.02	.89	-.02	-.06	2.89	1.31	.71
5 自分の興味を持てる職業が見つからず不安である	.02	.89	-.06	-.10	2.51	1.19	.67
27 自分がどんな職業に興味があるかわからないのが不安である	-.01	.79	.00	.04	2.66	1.22	.65
9 どのように自分にあった職業を見つけたらよいかかわからず不安である	.03	.56	.10	.24	3.26	1.28	.65
決定方略不安 ($\alpha = .82$)							
20 いろいろ考えすぎてひとつの職業に決められないのが不安である	.09	.03	.90	-.17	2.98	1.23	.72
11 興味を引く職業がいくつもあってひとつに決められないのが不安である	-.08	-.18	.86	-.07	2.92	1.26	.59
37 たくさんある職業を一つに絞っていけず不安である	-.07	.13	.72	.15	3.10	1.18	.74
38 いろいろな職業の中でどれがいいか迷ってしまい決められず不安である	.02	.10	.69	.18	3.04	1.23	.75
職業理解不安 ($\alpha = .88$)							
24 いろいろな職業があることを十分に知らないのではないかと不安である	.00	-.07	-.02	.87	3.52	1.13	.66
36 もっと職業について知る必要があるのではないかと不安である	.09	-.20	.12	.73	3.85	0.96	.54
16 業界、職種、企業などについてよく知らないのが不安である	-.04	.13	-.10	.73	3.60	1.14	.55
34 職業の内容がよくわからず不安である	-.03	.12	-.10	.69	3.06	1.15	.50
因子間相関	F1	-	.39	.20	.46		
	F2		-	.42	.61		
	F3			-	.55		

の相関係数を算出した。その結果、有意な正の相関が示された。これにより、短縮版の職業選択不安尺度は十分な構成概念妥当性を備えていることが示された。

続いて、併存的妥当性を検証するため、短縮版の職業選択不安尺度得点と特性不安尺度得点の相関係数を算出した。その結果、有意な正の相関が示された。従って、短縮版の職業選択不安尺度は、十分な併存的妥当性を備えていることが示された。

以上の結果から、職業選択不安尺度27項目から抜粋して新たに作成された16項目の職業選択不安尺度は依然十分な信頼性・妥当性を持つことが示された。従って、短縮された尺度を「職業選択不安尺度」として、以降の分析・研究で用いることとする。

職業選択不安尺度得点の分析

続いて、尺度得点についての性差・学年における差を検討した。まず、性別における尺度得点の合計の平均値を比較するため、*t*検定を行った。結果を

Table 4 に示す。その結果、合計得点において有意な差が認められた ($t(243)=2.64, p<.01$)。よって、女性の方が男性よりも職業選択不安が高いことが明らかになった。また、因子ごとの合計得点を算出し、平均値を比較したところ、性差が見られたのは、「決定方略不安」($t(243)=1.98, p<.05$)、「職業理解不安」($t(244)=3.24, p<.01$)であり、いずれも男子より女子の方が高いことが示された。

次に、学年差の検討を行うため、一要因分散分析を行った。その結果を Table 5 に示す。まず、合計得点において有意な差が見られた ($F(2, 233)=4.46, p<.05$)。Tukey 法による多重比較の結果、3年生が2年生より有意に高いことが示された。さらに、因子ごとの合計得点を算出し、平均値を比較したところ、学年差が見られたのは、「自己理解不安」($F(2, 234)=7.29, p<.01$)「職業理解不安」($F(2, 234)=10.37, p<.01$)であった。多重比較の結果、「自己理解不安」では、2年生より1年生が、2年生より3年生が高いことが示された。ま

Table 3 職業選択不安と、進路選択に対する自己効力、特性不安との相関係数

	職業選択不安 合計	職業移行不安	自己理解不安	決定方略不安	職業理解不安
進路選択に対する自己効力	.52**	.44**	.55**	.18**	.36**
特性不安	.31**	.30**	.20**	.18**	.22**

注) ** $p<.01$

Table 4 職業選択不安の男女別の平均値、標準偏差、及び*t*値

	男子		女子		<i>t</i> 値
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
職業選択不安合計	47.11	12.80	51.25	11.46	2.64**
職業移行不安	11.84	4.63	12.54	4.19	1.24
自己理解不安	10.79	4.31	11.66	4.24	1.56
決定方略不安	11.38	4.30	12.46	4.12	1.98*
職業理解不安	13.11	3.70	14.59	3.34	3.24**

注) * $p<.05$, ** $p<.01$

Table 5 職業選択不安の学年別の平均値、標準偏差、及び学年間の有意差

	1年		2年		3年		有意差
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
職業選択不安合計	49.79	11.13	45.98	11.30	51.56	12.34	2年<3年
職業移行不安	12.02	4.39	12.23	3.54	12.39	4.79	
自己理解不安	11.67	4.06	9.58	3.76	12.04	4.37	2年<1年, 3年
決定方略不安	12.37	3.94	11.61	4.61	12.15	4.11	
職業理解不安	13.73	2.91	12.63	3.17	14.99	3.62	2年<3年

た、「職業理解不安」では、2年生より3年生が高いことが明らかとなった。

考 察

本研究では、就職活動期に経験される不安のうち、職業選択から生じる不安についての尺度を作成することを目的とした。因子分析の結果、本尺度は「職業移行不安」「自己理解不安」「決定方略不安」「職業理解不安」の4因子から構成されていることが示された。尺度の信頼性に関しては、 α 係数を算出したところ、十分な内的一貫性を備えていることが確認された。また、妥当性に関しては、職業選択不安尺度と関連が予想される、進路選択における自己効力と特性不安との相関を検討した。その結果、いずれの尺度とも有意な相関関係が示されたことから、本尺度は、一定の信頼性と妥当性を兼ね備えていることが確認された。

また、職業選択不安尺度得点は男子より女子において高かった。このような性差が見られたことについては、大学生における職業に対する不安が、男子よりも女子において高いという先行研究の結果にも合致している(坂柳, 1995)。女性のライフコースは多様化しており、女子青年の役割移行においては選択肢が広まったことによって、かえって心理的葛藤が高まるとされているが(東・安達, 2003)、このような状況も、職業選択への不安を高めることになるかもしれない。

さらに、学年差による職業選択不安尺度得点は、2年生より3年生で高かった。都筑(1999)は、職業選択期の中でも、2年生は進路選択の試行段階、3年生は進路選択活動の実際的な開始段階と区別している。3年生になると、本格的な活動の開始と共に、就職に対する意識が高まってくるため、職業選択への不安が喚起されたと考えられる。

今後の課題

本研究では、就職活動期に見られる不安として職業選択不安を取り上げ、十分な信頼性と妥当性を兼ね備えた有用な尺度が作成されたといえる。また、実用面においても項目数は回答しやすく、調査協力者に対する負担は軽減されたといえる。さらに、職業選択に関する不安がどのような不安から構成されているのかを把握することが可能となった。今後の課題としては、具体的な援助の可能性を検討することである。例えば、職業移行不安に対しては、「社会人になること」について、より実際的な情報

を提供することで、漠然とした「就職」に対するイメージを明確にすることが不安の軽減につながるかもしれない。今後はそれぞれの不安にどのような援助が有効であるかを詳細に検討していき、介入の有効性を探ることが課題となってくる。

引用文献

- 会沢 勲・石川悦子・小嶋明子(1998). 移行期の心理学 こころと社会のライフイベント ブレーン出版
- 東 清和・安達智子(2003). 大学生の職業意識の発達 学文社
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- エリクソン, E.H. 小此木啓吾(編)(1973). 自我同一性-アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房
- 藤井義久(1999). 女子学生における就職不安に関する研究 心理学研究, 70, 417-420.
- 船津静代(2004). 大学内における就職相談の役割-名古屋大学での就職相談の実践を通じて- 大学と学生, 6, 14-25.
- 喜田裕子・高木茂子(2002). 大学生の進路(キャリア)をめぐる心理教育的支援に関する基礎的研究 人文社会学部紀要, 2, 39-48.
- 小杉礼子(2003). フリーターという生き方 勁草書房
- 小杉礼子(2005). フリーターとニート 勁草書房
- 厚生労働省(2007). 厚生労働白書
- 松尾雄毅・佐野秀樹(1993). 職業未決定の類型と処遇-アメリカと日本における研究の概観- 東京学芸大学第1部門, 44, 273-286.
- 西山 薫(2003). 就職不安とプロアクティブパーソナリティ特性および自己効力に関する研究 人間福祉研究, 6, 137-148.
- 大久保幸夫(2002). 新卒無業。-なぜ、彼らは就職しないのか 東洋経済新報社
- 斉藤幸江(2001). 大学3年生必携 あきらめないで就職活動 週刊東洋経済, 5732, 72.
- 坂柳恒夫(1996). 大学生の職業的不安に関する研究 広島大学大学教育研究センター大学論集, 25, 207-227.
- Salomone, P.R. & McKenna, P. (1982). Difficult Career Counseling Cases: II-The Indecisive Client. *Personnel Guidance Journal*, 60, 496-500.

- 清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, **29**, 348-353.
- 清水和秋 (1983). 職業的意思決定と不決断 関西大学社会学部紀要, **14**, 203-222.
- 下村英雄・堀 洋元 (2004). 大学生の就職活動における情報探索活動：情報源の影響に関する検討 社会心理学研究, **20**, 93-105.
- 清水和秋 (1990). 進路不決断尺度の構成 - 中学生について - 関西大学社会学部紀要, **22**, 63-81.
- Spielberger, C.D., Gorsuch, R.L. & Lushene, R.E. (1970). *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory (Self-Evaluation Questionnaire)*. Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.
- スーパード.E. 日本職業指導学会 (訳) (1960). 職業生活の心理学 - 職業経歴と職業的発達 - 誠信書房
- Taylor, K.M. & Betz, N.E. (1983). Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63-81.
- 都筑 学 (1999). 大学2 - 4年生の進路選択と時間的展望 教育学論集 (中央大学), **41**, 119-137.
- 浦上昌則 (1995). 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, **42**, 115-126.
- 渡辺三枝子・E.L.ハー (2001). キャリアカウンセリング入門 人と仕事の橋渡し ナカニシヤ出版
- 山本多喜司・S,ワップナー (1992). 人生移行の発達心理学 北大路書房

付 記

本研究を行うにあたり、データ収集をご協力くださいました黒田卓哉さん、清水英壽さん、また、調査に快くご協力くださいました先生方、就職課の皆様、そして学生の皆様には、厚くお礼を申し上げます。

(受稿3月21日：受理5月7日)